



ラントと
月のワルツ



いくえ

ラント

地球は豊かで、平和だ。

虹が空をかけていた。

いつも素敵なハーモニーが重なり合い、皆それぞれ笑って暮らしていた。

誰もがご機嫌で、誰もが楽しく過ごしていた。

踊っても、笑っても、歌っても！

彼らは歌った。

喜びを感じた時に

感動した時に

いつも歌っていた。

とくに歌うことが好きな男の子がいた。

ラント。

歌った、空に響き渡るように

歌った、虹を見て

歌った、太陽を浴びながら。

夜の声

ラントは日が落ちると、家族の下に帰ってよく寝た。
眠りは彼を夢のかなたに連れて行ったが、彼はいつも覚えていなかった。

だから何も気づかぬまま、目が覚めて朝を迎えていた。

ある夜、ラントはふと疑問に思った。
「日がくると、僕は寝るのだけど、その間、この世界はどうなっているのだろう？」

母に尋ねた。
「そうね、とっても暗くなって静かになるわ。」

「それはこわい！」
とラントは答えた。

母
「あら、怖くないわ。
月や星が輝いているもの。」

ラント
「月や星？
月なら、僕も見ることがあるよ。
太陽の反対側にある丸いやつね。
とってもひ弱で昼になると、ほとんど見えないんだ！
そんな弱々しい丸いのなんて、頼りないなあ。」

ラントがそう言うと、姉は
「あら、夜の月はとっても美しいわ。」
と答えた。

見えない月

ラント

「お姉ちゃんはお月様を見たことがあるの？」

姉

「あるわ。お星様も！キラキラして素敵なのよ！
見たことないなんて勿体無い！」

ラントはそう言われると、見なくなった。

でもひ弱な月がキラキラするなんて、信じられなかった

ラントは今夜月を見ることに決めた。

姉

「あら、ラント。一緒に見ましょう。」

ラントが姉と空を眺めていた。

日がくれてくると、空が遠くからすーと変わって行く。

まず、だんだんオレンジになる。

そして、紫の線に続いて、青くて暗い空が、、、、。

あれ？白くて丸いやつが下の方に見えるよ。

ラントは眠ってしまった。

朝

いつも通りに目が覚めた。

ラントは月を見ることができなかったことに気がついた。

ラントはとても落ち込んだ。

姉

「ラント、いつの間にか眠っていたわ。

私も気づかなかったけど、とても深く寝ていたからそのままにしたのよ。

また今日も一緒に見ましょう。」

その日からラントは毎晩、姉と一緒に夕暮れの空を眺めた。

そして夜を待った。

月を見るために。

姉はラントに、

低いところにある白くて丸いものが月だと、教えた。

やはり、キラキラ輝いているようには見えなかった。

「それがね、この空の一番上の、一番高いところに来た時に、とっても綺麗なの！」

ラントはワクワクしたが、また眠ってしまった。

ウサギ

何度もチャレンジをしたが、ラントは月を見ることなく眠ってしまった。

ラントはとても落ち込んだが、
「いつか見れるようになるわ！」
と姉は励ました。

昼にラントは日の暖かい日、野原に出た。
太陽は草や花、木や動物を照らしていた。
場がパワフルで生き生きとした。

ラントは歌った。嬉しくなって歌った。

そうすると、ひょっこり、ウサギが現れた。

ウサギ

『あなたの歌、とても好きよ。』

ラント

「ありがとう。ウサギさん。僕は歌うのが好きなんだ。」

ウサギ

『とても素敵ね。私は月に行くのが好きなのよ。』

ラント

「月に行く？君は月に行けるの？」

ウサギ

「ええ、空に月が浮かぶ時、いつでも遊びに行けるのよ。」

月のルート

ラント

「僕！月を見たくて毎晩遅くまで起きるのだけど、日が落ちると寝てしまっても見れないんだ。」

ウサギ

『それは残念ね。でも私たちは寝ている間に月に行くのよ。』

ラント

「寝ながら行くの？」

ウサギ

『むしろ、寝ながらじゃないと、行けないのよ。』

ラント

「本当？じゃあ僕も寝ながら行けるかな？」

ウサギ

『ええ、きっと。』

ラント

「じゃあ今晚連れて行ってよ！」

ウサギ

『今晚はダメ。今晚は新月と言って月が空にでないの。』

ラント

「新月？」

ウサギ

『月が出ない日よ。』

ラント

「そんな日があるんだ！」

ウサギ

『あるわ。月はリズムがあるの。

しぼんで、ふくらんで、しぼんで、また膨らむの。

このハーモニーが私大好きなの。』

ラント

「へえー、太陽はしぼんだり膨らんだりしないのに、、、。」

ウサギ

『それぞれが違うものよ。』

ラント

「そうなんだ、、、。じゃあ明日行けるかな？
明日は月が出るでしょ？」

ウサギ

『明日は少ししか月が出ないから、あなたは難しいわ。
ここから10日が過ぎた頃、月がまん丸く大きくなるの。その時に一緒に行きましょう。』

その頃に、またここに来てね。

もちろん一人で、月は恥ずかしがり屋だから、二人だけの秘密ね。』

月の正体

ラントは日を数えた。

その日から姉と月を見ることをやめた。

ラントはわくわくしながら日を数えた。

ラントは花に聞いた。

「ねえ？月ってどんなもの？」

花

『私たちもわからないの。あそこの月見草なら知ってるわ。彼らは夜に咲くから。』

ラントは月見草に話しかけたが、
日が出ているため眠っていた。

ラントは他に月を知っているものを探したが、
みんな昼に寝ていた。

また落ち込んでいると、姉がそっと教えてくれた。

「ラント、月のことを言葉にするのはむずかしいのよ。見るのが一番よ。」

そうして月がまあるく膨らんだ頃、
夢の中にウサギが出てきた。

ウサギ

『ラントさん、今晚よ。あの場所に来て。』

月見草

ラントは日がくれる前、例の場所に行った。

ウサギが隠れていた。

『ラントさん、こっちよ。』

そこは月見草の近くだった。

ウサギ

『彼らを押しつぶさないように寝るの。

彼らが月まで運んでくれるから。』

ラントとウサギは月見草の傍で目をつぶった。

月の世界

深いトンネルを通ったように感じた。
そのとき、ラントはそこは月だと感じた。

白くてとても静かな場所に立っていた。

「今晚は。はじめまして。」
振り向くと大きなフワフワした人がいた。
まるで天女のような。

ラントは驚いた！
月に誰かがいるなんて。

ウサギがその人の隣で座っていた。
『私のお友達よ。
いつもここから、私たちの世界を見守ってくれているの。』

ラント
「僕たちの世界？」

ウサギ
『ほら、後ろみてごらん。』

ラント
「わあ—————！」

ウサギ
『ビックリした？』

そこは大きくて、青くて、とても綺麗な星が見えた。
ラントたちが住んでいる星だ。

月の天女
「私たちはいつもここから、あなたたちの世界を見えています。
とても綺麗で美しい。」

月の天女

ラントは思った。

「ねえ、この星とお月様じゃどっちが綺麗なの？」

ウサギ

『ふふ、比べれないわ。それぞれが美しいもの。私はどっちも好きよ。』

ラントは嬉しくなった。

ラントがいつも居てる世界がとっても綺麗だったこと。

この月もとっても静かで美しいこと。

ラント

「ねえ！ぼく、またここに来ていい??」

月の天女

「ラントさん、いつでも来てもいいわ。

でもあなたは今の星の方がずっと好きなのよ。

だから、満月の日しか、ウサギとともにしか来れないわ。

でも大丈夫。

少し寂しいかもしれないけど、私はいつもここからあなたたちを見守ってるわ。

ここは夜に見上げるとすぐに思い出せるように。」

月のワルツ

ラントは少し落ち込んでしまった
「でも、ぼく月を見る前に寝ちゃうんだ。」

月の天女
「そうね、、、。」

ウサギ
『あ！じゃあ歌ったらいじゃない！
月の歌よ。ここに来たことを、すぐに思い出せるように。
私たちはその歌を聴いて、あなたを見つけるわ。』

ラント
「そうだね！それはいいね。」

ラントは目をつぶった。
いつもと違う月の大地を踏みしめた。
少しひんやりした月の空気を吸い込んだ。
目の前にある銀色に輝く世界を浴びた。

ラントは歌った。
月の歌を。

ウサギ
『素敵ね。まるで月のワルツよ。
私、この歌、大好き！！
ここに来たら毎晩歌うわ！』

月の天女もラントも、うさぎも一緒に歌った。

月のワルツを

ひみつ

朝、姉がラントに言った。

「昨日！お月様が歌ってたの。
お母さんもお父さんも信じなかったけど私はちゃんと聞いたの！
とても綺麗だったわ。」

ラントはウサギとの話をしようと思ったけど、秘密にするした。

だって約束ですもの。

おしまい。